

神仏分離令

〈解説文〉

別紙之神職共^江之達向
国々触頭未定之事^ニ付、
其藩々より可被為達
置候事

閏四月十九日 神祇事務局

別紙

一神職之者家内^ニ至迄、
以後神葬祭相改可
申事

一今度別当・社僧、還俗
之上者、神職^ニ立交候
之節茂神勤順席等、
先是迄之通、相心得可
申事

右之通被
仰出候事

閏四月 神祇事務局

諸国

神職

右之通従

朝廷被 仰出候間、在中
神職^江可被相触候、以上

五月

〈読み下し文〉

別紙之神職どもえの達^{たつ}し向き
国々触頭^{ふれがしら}未定のことにつき、その藩々より達し置きなさるべく
候こと

閏四月十九日 神祇事務局^{じんぎ}

別紙

一神職の者家内にいたるまで、以後神葬祭^{しんそうさい}相改め申すべきこと
一このたび別当^{べつとう}・社僧^{しゃそう}、還俗^{げんぞく}のうえは、神職に立ち交じり候の節
も神勤順席等、まずこれまでの通り、相心得^{こころえ}申すべきこと
右の通り仰^{おお}せ出^{いだ}され候こと

閏四月 神祇事務局

諸国

神職

右の通り朝廷より仰せ出され候あいだ、在中神職え相触れらるべく候、以上

五月

〈用語の解説〉

・触頭…：寺社奉行からの触れを各寺社に伝達したり、寺院からの訴訟を取り次いだ。

・別当…：神社に付属しておかれた寺院の僧侶。

・社僧…：神宮寺・別当寺の僧侶で、神社に属して仏事にあたった。

・還俗…：出家した者がふたたび俗人にかえること。

・神祇事務局…：慶応4年正月の官制で定められた神祇事務科は、

2月に神祇事務局、閏4月21日には神祇官となった。

〈解説〉

慶応3（1867）年12月、王政復古の大号令を発し新政権の樹立を宣言した。新政府は、神祇官を再興するとともに、神社の別当・社僧の復飾（ふくしよく神官に復職）や、神社から仏像・仏具の除却（じよきやく）などを相次いで命じている。これら一連の法令を神仏分離（しんぶん神仏判然）令とよび、これまで続いてきた神仏習合を否定した。

翌年（明治元年と改元）、神祇事務局は神職とその家族にいたるまで神葬祭（しんそうさい）に改めることを布達した。寺請制度のもとで神葬祭は禁止されており、神職の家といえども制約を受けていた。また別当・社僧の還俗を命じたうえで、神主・社人として「神勤」することとしている。

樋口村（現在の辰野町）を例にとると、荒神社別当寺の香蓮寺住職の観清は明治2年に還俗を許され、改名して神職となった。これにより香蓮寺は廃寺となっている。それにともなって、檀家は仏葬から神葬に改宗し、祖霊社（それいまつ）を祀るようになった。

明治3年には大教宣布（だいきょうせんぶ）の詔（みことり）を発し、さらに伊勢神宮を頂点とする神社制度や、皇室行事を中心とする国家の祝祭日を定めた。政府の意図に反して、庶民のあいだには寺院の管理・統制に対する反感が仏教排撃へつながり、仏像・仏具や寺院の破壊といった廃仏毀釈（きしやく）が各地でおこった。

小野村（現在の辰野町）では、神仏分離令が出されるよりさきに、はやくも廃仏毀釈のまえぶれがあった。観音・地藏・念仏供養塔などが倒され、首がもぎとられるなどの破壊行為が行われた。こうした行為を、同村の寺子屋師匠は日記に「前代未聞の狼藉（ろうぜき）」「末に如何あらんか」と記している。また、仏教的な地名であつ

た「餓鬼山」「仏沢」を「五十鈴山」「藤沢」と改めた。

【参考文献】

- ・『辰野町誌 歴史編』辰野町誌刊行委員会
- ・岡田莊司編『日本神道史』吉川弘文館
- ・安丸良夫『神々の明治維新』岩波新書